

1. 科目名 (単位数)	教育史特論 (2単位)	池袋・名古屋	3. 科目番号	EDMP5233
2. 授業担当教員	【池袋】高橋 勝 【名古屋】石崎 達也			
4. 授業形態	演習		5. 開講学期	【池袋】春期 【名古屋】秋期
6. 履修条件・他科目との関係	履修条件は特になし			
7. 講義概要	<p>近代における「子どもの発見」の意味することの両義性について、教育思想史的に考察する。都市化と核家族化が進行しはじめたほぼ18世紀のヨーロッパに、それまで共同体の中に埋め込まれていた「小さな大人」が、「子ども」という独自の存在として浮上するようになる。この「子ども」という新たな観念の登場が、同時に「教育」(education)という意識の自覚化を促し、「子どもの発達助成」という近代教育思想の原型が形づくられてくることを、資料を用いて説明する。</p> <p>しかし、この大人から差異化された「子ども」という観念は、二重の意味でポレミシユな問題を生むことになった。第一に、近代学校制度を推進する立場からは、「子ども」の独自性と発達する権利が重視され、「子ども」はまさに未来の担い手として、20世紀初頭に「子ども中心主義」という世界的な新教育運動を巻き起こした。しかし、大人と共に暮らす「生活者」として子どもを見るならば、「子どもの発見」は、子どもが地域から引き離され、学校空間に囲い込まれて、公教育という制度の網目の中で規律化されていく端緒ともいえるものでもある。「子どもの発見」という、この両義性をどう考えるかを、受講生に深く考えさせる。近代における「子どもの発見」は、子どもを解放したのか、それとも制度に囲い込んだのかという問題を、主にJ.J.ルソー以後の近代教育思想史の展開の中で検討する。この問題は、子どもの発達とは何か、学校の役割は何か、不登校の子どもに大人はどう対応すべきかという、きわめて現代的な問いを投げかけてくる。様々な歴史資料を元に近代教育思想の展開を辿りつつ、その解放性と制度化というパラドクシカルな構造を受講生が深く理解し、検討できるようにすることが、本講義の概要である。</p>			
8. 学習目標	<p>「子ども」とは、ヒトをある基準で二分法的に区分けしたときのコトバである。ふだん私たちは、このコトバを自明なことのように使用しているが、そこには歴史的に構築された見えないフィルターが介入している。社会史家、Ph.アリエスの文献によれば、中世のフランスでは、子どもは大家族の共同生活の中で、大人たちと質的に変わらない「小さな大人」として育てられたが、商業都市が発達する18世紀になると、都市部では核家族化が進行し、子どもや育児、教育に対する親の教育意識が高まってくる。上流中産階級の間で、育児法や教育法が話題になり、子どもの独自性や未来社会を担う存在としても注目されるようになる。18世紀の啓蒙の時代が子どもに対する「大人のまなざし」の変化を生んだ。欧米の歴史資料を講読しながら、子どもに対する「まなざしの変化」を受講生に実感してもらい、子どもをどのように見るかは、大人自身の「まなざし」が構築するものであることを、受講生が理解できるようにする。さらに、「子どもの問題」とは、実は「大人自身の問題」と不可分であること、そして「大人のまなざし」のありようの解明を抜きにして、「子どもの問題」を語ることはできないことを理解できるようにすることが、学習目標である。</p>			
9. アサイメント(宿題)及びレポート課題	授業内容について、800字程度の質問やコメントを書いて提出する。			
10. 教科書・参考書・教材	<p>【教科書】(池袋)宮澤康人『〈教育関係〉の歴史人類学』学文社、2011 (名古屋)宮澤康人『〈教育関係〉の歴史人類学』学文社、2011 今井康雄編『教育思想史』有斐閣、2009</p> <p>【参考書】宮澤康人『大人と子供の関係史序説——教育学と歴史的方法』柏書房、1998 高橋勝・下山田裕彦編『子どもの〈暮らし〉の社会史』川島書店、1997 関啓子・太田美幸編『ヨーロッパ近代教育の葛藤——地球社会の求める教育システムへ』東信堂、2009 Ph.アリエス(杉山光信・杉山恵美子訳)『〈子供〉の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房、1986</p>			
11. 成績評価の規準と評定の方法	<p>○成績評価の規準 出席率20%、小課題レポート、最終レポートを総合的に判断する。</p> <p>○評定の方法 出席率の他、小課題レポート、最終レポートの内容で中心に評価する。</p>			
12. 受講生へのメッセージ	前近代社会における子どもは、大人と共に暮らす共同生活者であった。しかし、近代化の進行と共に、子どもは、ますます親、地域の大人たちから切り離され、学校で教育されるようになった。近代教育の誕生とともに始まる「子どもの保護」と「大人世界からの隔離」をどう考えるか。この問題に、「教育の機能的合理化」と「子どもの揺れ動く生」という2重の照明を当てると、一体何が見えてくるのでしょうか。一緒に考えていきましょう。			
13. オフィシアワー	授業中に伝える。			
14. 学習の展開及び内容	【テーマ、学習の目標、学習の内容、キーワード、学習の課題、学習する上でのポイント等】			
1. テーマ	歴史のなかの子ども			
【学習の目標】	啓蒙、進歩、発達、開発という観念の誕生と子どもという観念の誕生を関連づけて学習する。			
【学習の内容】	「子ども」とは、「大人」から区別される必要性が生んだ近代人(まなざし)の構築物ではないか。啓蒙、進歩、発達、開発、保護という観念(フィルター)で子どもを見るようになった教育の誕生の時代に照明をあてる。			
【キーワード】	進歩、発達、保護、「子ども」という観念			
【学習の課題】	進歩、発達、保護という観念の誕生と、子どもという観念の誕生を関連づけて学習する。			
【参考文献】	Ph.アリエス(杉山光信・杉山恵美子訳)『〈子供〉の誕生』みすず書房、1986			
【学習する上での留意点】	社会的構築主義の方法を教える。			

2. テーマ	小さな大人としての子ども
【学習の目標】	子どもという観念の登場の由来を、社会史的方法で学習する。
【学習の内容】	都市化、貨幣経済、核家族化、進歩、未来という系が進行する中で、子どもに注目が集まることを学習する。
【キーワード】	都市化、核家族化、産業化、子ども、大人、未来、進歩
【学習の課題】	近代化のなかで浮上する子どもという〈まなざし〉を学ぶ。
【参考文献】	J. J. ルソー（今野一雄訳）『エミール——教育について』（上・中・下）岩波文庫、2015
【学習する上での留意点】	「子ども」を実態視せずに、社会史の文脈のなかで「子ども」をとらえる。
3. テーマ	大人から差異化された子ども
【学習の目標】	大人から差異化され、社会から隔離されて、教育される子どもの明暗を考える。
【学習の内容】	大人から差異化されて、社会から隔離されて、教育される子どもを考える。
【キーワード】	差異化、保護・教育の対象としての子ども、囲い込まれた子ども、大人との共同性
【学習の課題】	「子どもの発見」が、なぜパラドックスなのか、その理由を詳細に学習する。
【参考文献】	J. J. ルソー（今野一雄訳）『エミール——教育について』（上巻）岩波文庫、2015
【学習する上での留意点】	「子どもの発見」の意味を、歴史の文脈のなかで検討する。
4. テーマ	都市化と核家族化
【学習の目標】	都市部における近代家族の誕生を通して、子どもへの愛着の〈まなざし〉と教育意識が高まることを学習する。
【学習の内容】	パリでは、都市化と核家族化の進行によって、多産多死亡の時代から少子化への移行が始まることを学習する。
【キーワード】	出生率の変化、乳幼児の死亡率の変化、母性という観念の構築、近代家族の誕生
【学習の課題】	出生率の変化、乳幼児の死亡率の変化、母性という観念の構築、近代家族の誕生を通して、子どもへの愛着のまなざしを学習する。
【参考文献】	Ph. アリエス（杉山光信・杉山恵美子訳）（1986）『〈子供〉の誕生』みすず書房、1986
【学習する上での留意点】	近代家族、教育家族とは何であったのかを、理解できるようにする。
5. テーマ	「教育」という意識
【学習の目標】	身分、属性に応じた無意識的社会化から、子どもの諸能力の開花へ、という教育意識の変化を学習する。
【学習の内容】	身分に関係なく、子どもの知的能力を開き、情操を育てるとする「教育」(education) 意識は、近代に際立っていることを学習する。「自然の理性化」という啓蒙思想を下地にして子どもの理性化が図られる。
【キーワード】	教育、啓蒙、理性、進歩、未開、野蛮
【学習の課題】	子どもの知的能力を開くという「教育」(education) 意識は、近代に際立っており、「自然の理性化」という啓蒙思想を下地にして子どもの理性化が図られることを学習する。
【参考文献】	J. ロック（服部知文訳）『教育に関する考察』岩波文庫、1980
【学習する上での留意点】	「教育」という意識が浮上する時代背景を学ぶ。
6. テーマ	自立、発達という意識
【学習の目標】	単に「大人になる」という考え方から、現在の大人を乗り越えて「進歩、発達する」という進歩史観に支えられた子ども観の登場が意味する背景を学習する。
【学習の内容】	子どもは、単に「大人になる」という考え方から、現在の大人を乗り越えて「進歩、発達する」という進歩史観に支えられた子ども観の登場の意味を学習する。
【キーワード】	子どもに負荷された自立 (independence)、「発達」(development) という観念の意味を、詳細に検討する。
【学習の課題】	共同体や家族における人々の支え合いという現実を離れて、自立 (independence)、「発達」(development) という観念が独り歩きしはじめる理由を考える。
【参考文献】	宮澤康人『〈教育関係〉の歴史人類学』学文社、2011
【学習する上での留意点】	共同存在としての人間という現象学の視点から、自立の問題をとらえ直すように指導する。
7. テーマ	子どもの能力を開く学校
【学習の目標】	近代学校の果たした歴史的役割を調べる。
【学習の内容】	近代国家が整備した近代学校の潜在的に有する子ども観、教育観を明らかにする。
【キーワード】	近代学校、人間の完成可能性、知力を開く学校、福沢諭吉の学問観
【学習の課題】	近代学校の啓蒙的側面と社会統合の両側面を調べる。
【参考文献】	高橋勝「〈子どもの世紀〉という逆説——〈子ども〉を大人から差異化する視線」（宮崎かすみ編『差異を生きる』明石書店、2009）
【学習する上での留意点】	近代学校における子ども観と教育観を明らかにする。
8. テーマ	対象化された自然
【学習の目標】	近代教育思想において、自然がどのように位置づけられてきたのかを検討する。
【学習の内容】	近代教育思想において、自然＝野蛮、文明＝進歩という二項対立の自然観が、子どもの教育にも反映されていることを検証する。啓蒙の時代では、例外的な自然主義者ルソーの合自然の教育。
【キーワード】	自然、未開、合理性、進歩、知性
【学習の課題】	子どもが自然のカテゴリーから、文明のカテゴリーに囲い込まれていく経緯を調べる。
【参考文献】	浜田寿美男『子どもという自然と出会う』ミネルヴァ書房、2015
【学習する上での留意点】	人間を生命体としてとらえ直すことの重要性を学習する。
9. テーマ	開発される自然 / 開発される子ども
【学習の目標】	原初的な自然や生まれ落ちた子どもを、開発と社会進歩というフィルターで見る〈まなざし〉を相対化する。
【学習の内容】	発達、開発、向上ということが自明視されてきた近代の子ども観を再検討する。
【キーワード】	発達、開発、無限の進歩、生産性の向上
【学習の課題】	子どもを見る近代の大人の〈まなざし〉は、進歩史観、発達史観に枠づけられる傾向が強いことを学ぶ。
【参考文献】	中沢新一『純粋な自然の贈与』講談社学術文庫、2009

【学習する上での留意点】「開発」に代わる子どもを見る新しい〈まなざし〉は何か、と受講生に問いかける。	
10. テーマ	関係生成する子ども
【学習の目標】	多種多様な関係性のなかで、自然に学んでいく子ども。
【学習の内容】	子どもを強固な保護枠の中に囲い込むのではなく、子ども、若者、大人、高齢者の輪の中に溶け込ませることが必要であることを学習する。
【キーワード】	意図的学習、偶発的学習、授業、経験、体験
【学習の課題】	様々な関係性の輪のなかで、試行錯誤を繰り返しつつ学び、育つ子どもを考える。
【参考文献】	真木悠介『気流の鳴る音』ちくま学芸文庫、2003
【学習する上での留意点】	関係を手繰り寄せながら生世界を広げていく子ども、若者の姿を考える。
11. テーマ	子どもの自己活動
【学習の目標】	新教育運動を主導した子どもの「自己活動」という概念について学習する。
【学習の内容】	近代教育思想のキーワードであり、新教育運動を主導した子どもの「自己活動」(Selbsttätigkeit, self-activity)について学習する。
【キーワード】	自己活動、直観、身体感覚、作業
【学習の課題】	近代教育思想のキーワードである自己活動、直観、身体感覚、作業等の概念について学習する。
【参考文献】	長尾十三二編『新教育運動の理論』明治図書、1988
【学習する上での留意点】	活動する存在は、学校をはみ出して社会の中で活躍する。
12. テーマ	イギリスの新教育運動
【学習の目標】	A.S. ニールのサマーヒル・スクール (Summerhill school)を中心に、イギリスにおける新教育運動の展開を学ぶ。
【学習の内容】	教授学校から自由と創造性に溢れた活動学校への転換を調べる。
【キーワード】	ニールのサマーヒル・スクール、活動学校、新教育運動
【学習の課題】	イギリスの中等教育における教授学校から自由と創造性に溢れた活動学校への転換を調べる。
【参考文献】	長尾十三二編『新教育運動の理論』明治図書、1988
【学習する上での留意点】	新教育運動と現代のフリースクール運動のつながりについても調べる。
13. テーマ	ドイツの新教育運動
【学習の目標】	G. ケルシェンシュタイナーを中心に、ドイツにおける新教育運動の展開を学習する。
【学習の内容】	ドイツにおける新教育運動の旗手であった G. ケルシェンシュタイナーがミュンヘン市で行った学校改革を調べる。
【キーワード】	新教育運動、作業(労作)学校運動、作業学校、芸術教育運動
【学習の課題】	ドイツにおける新教育運動の多様な展開を調べる。
【参考文献】	G. ケルシェンシュタイナー／高橋勝『作業学校の理論』明治図書、1983
【学習する上での留意点】	新教育運動と同時期に誕生したシュタイナー学校 (R.Steiner Schule) についても調べる。
14. テーマ	アメリカの新教育運動
【学習の目標】	J. デューイの学校改革を中心に、アメリカにおける新教育運動の展開を調べる。
【学習の内容】	デューイのシカゴ大学附属実験学校における子どもの作業活動中心の学校づくりを調べる。
【キーワード】	シカゴ大学附属実験学校、オキュペーション (occupation, 作業)、学校と社会
【学習の課題】	デューイのシカゴ大学附属実験学校のカリキュラムと子どもの作業活動中心の授業展開を調べる。
【参考文献】	J. デューイ (市村尚久訳)『学校と社会／子どもとカリキュラム』講談社学術文庫、2000
【学習する上での留意点】	現在注目されている「生きる力」とデューイの実験的経験主義は、どこが同じで、どこが異なるのか。
15. テーマ	地球社会における市民形成
【学習の目標】	保護と自由のあいだで揺れ動く近代教育の図式に対して、これからの子ども観と教育観を展望する。
【学習の内容】	「保護されるべき子ども」と「自由に活動すべき子ども」という対立軸の間で揺れ動く現代の教育は、これからどこに向かうべきなのか、を考える。
【キーワード】	「保護されるべき子ども」、「自由に活動すべき子ども」
【学習の課題】	これからの地球社会が求める市民形成に向けて、子ども観と教育観を創造的に捉え直す作業を行う。
【参考文献】	関啓子・太田美幸編『ヨーロッパ近代教育の葛藤——地球社会の求める教育システムへ』東信堂、2009
【学習する上での留意点】	各自の修士論文のテーマにつながるように助言する。